熊本市の少子化の現状と子育て支援の考察

― 人口密度の近い政令指定都市11市との比較から ―

はじめに

近年、「日本の少子化問題」や「過去最低の出生率」という言葉を、テレビやネットニュースで頻繁に目にする。では、自分が住む熊本市の少子化は、全国と比べてどのような状況なのだろうか。そこでまず、全国の市区町村の人口密度を箱ひげ図に表し、熊本市が全国のなかでどのような位置にあるのかを確かめることにした。

Q1　熊本市は全国でどのあたりに位置するのか

図1　全国1741市区町村の人口密度の分布（2022年）

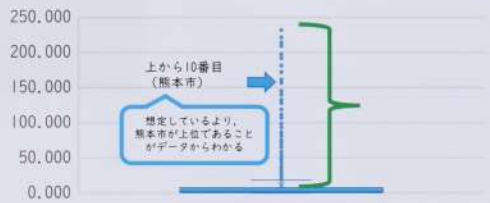
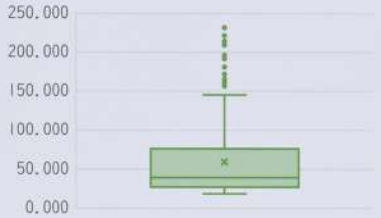


図2　外れ値だけを抽出した分布（2022年）



〔結果〕全国の市区町村のなかで、**熊本市の人口密度は「上側の外れ値」**に位置する。全国平均をはるかに上回る、人口が高度に密集した大都市だといえる。
〔考察〕全国平均と比べるのは公平でないため、**同じく外れ値に属する大都市グループのなかで比較**することにした。

〔結果〕上位の外れ値の都市だけで改めて箱ひげ図を描くと、熊本市は外れ値ではなくなり、大都市のなかでは標準的な人口密度の範囲に収まっていた。
〔考察〕主要都市グループ内では突出した過密ではない。そこで、同じグループで行政規模も近い「政令指定都市」を公平な比較対象として選んだ。

Q2　11都市の出生率の違いは？

図3　11都市の出生率の推移（2016年＝1.00）



〔結果〕2016年から2022年にかけて、11都市すべてで出生率は低下し、少子化が進行している。そのなかで熊本市（紺色）は、**つねに上位の水準を維持している。**
〔考察〕11都市すべてで少子化が進むなか、熊本市は上位の水準を保ち、減少の仕方も比較的おだやかである。この背景には子育て**環境の違い**があるのではないかと考え、次に保育園等の状況に注目する。

Q3　11都市の保育園等の状況は？

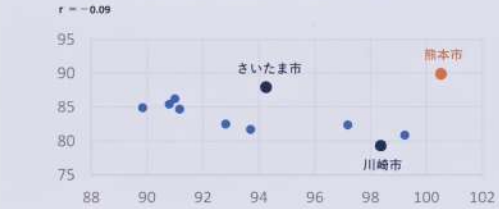
図4　定員充足率と待機児童数（2021年）



〔結果〕11都市のなかで、熊本市の定員充足率は100.5%と最も高く、**受け入れ体制が充実している。**待機児童数も0人である。
〔考察〕定員充足率が100%を超えるとは、定員以上の受け入れ枠を確保できていることこれが待機児童0人につながっていると考えられる。**「預け先に困らない」**環境が、熊本市の高い出生率を支える一因ではないかと考えた。

Q4　保育の充実は出生率と関係するのか？（11都市で検証）

図5　定員充足率と出生率（2021年）の関係



〔結果〕横軸に定員充足率、縦軸に2022年の出生率をとって11都市を比べると、両者に関係はほとんど見られなかった（r=−0.09）。充足率が高い川崎市は出生率の維持が最下位、充足率が中位で待機児童のいるさいたま市が最上位である。
〔考察〕保育の受け皿の「量」だけでは、11都市の出生率の違いは説明できない。熊本市が高い出生率を保つ背景には、保育の充実に加えて、住環境や家族の支えなど複数の要因が重なっていると考えられる。

まとめ

結論

熊本市は人口密度の高い大都市グループでありながら、他都市と比べて高い出生率を維持している。その土台の一つに、**定員充足率100.5%・待機児童0人という手厚い保育の受け皿**がある。ただし11都市全体でみると、充足率の高さと出生率の維持に明確な関係はなく（r=−0.09）、保育の「量」だけでは違いを説明できない。**熊本市の強みは、保育の受け皿に加え、住環境や家族の支えなど複数の子育ての土台が重なっている点にあると考えられる。**今後は「量」に加えて、保育士の確保・負担軽減といった「質」や、多面的な支援へと視野を広げることが求められる。

出典：独立行政法人統計センター「SSDES」（2016年、2017年、2018年、2019年、2020年、2021年、2022年）／こども家庭庁「保育所等関連状況取りまとめ（2021年）」